誇り

高校一年　O・R

「あ、ユダヤ教徒の人だ。」

帰国時のイギリスのヒースロー空港で友達が放った一言。この言葉が、英国語学研修で一番頭に残った言葉だ。

私がユダヤ教徒の方を見るのはこの時が初めてだった。彼らは親子で訪れていて、空港内の地図を見ていた。父親は黒いハット、子どもは黒い丸い帽子を被っていた。これらが、彼らがユダヤ教徒であることを示していた。私は、彼らを見た瞬間、背中がゾクッとした。その時は「何故だか分からないが怖い。」そう思った。きっとこの怖さは、初めて目にしたユダヤ人に衝撃を受けたからだろう。歴史上何度も迫害を受けてきたユダヤ人が目の前にいる。とりあえず私は彼らが実在していることが理解できたくらいだった。それほど普段の生活と馴染みが無かった。本の中や画面越しでしか彼らを見たことがなかった。だから私は、数十秒間も彼らを見つめてしまった。「彼らがナチスの迫害などから生き残ったユダヤ人か。」見つめながらそう思った。ずっと見つめてしまったためか、ユダヤ教徒のその子どもは私を睨んできた。「なぜ僕はあなたに見つめられているの。」そう目で私に問いかけていたようだった。

学校では『ハンナのかばん』や『アンネの日記』などの実話を聞いて、ユダヤ人の方々が迫害を受けてきたという歴史を学んだ。「たとえ宗教や価値観が違っても他人を傷つけてはいけないし、優劣などないということをみんなが自覚して、平和な世界が訪れますように。」これは、『ハンナのかばん』を学習したときの私の大まかな感想だ。だが私は何もしていない彼らを見つめて不信感を与えてしまった。また、私は「なぜ彼らはわざわざ帽子を被ってユダヤ教徒であることを公表するのか。」と疑問に思った。私のように宗教などを示さない格好をすれば、珍しさ故に知らない人からじろじろ見られ

ることもないのではないか。ユダヤ教徒の方々は、世界に〇・二パーセントほどしかいないと言われている。だから、様々な人に珍しがられ見られることは分かっているだろうになぜなのか。

「なぜ帰属意識を表に出すのだろう。」

この問いを考えているときに、語学研修中のことで思い出したことがあった。

それは、研修中にあった英国人の生徒とのディスカッションのときに「イエローモンキー。」と、ある友達が罵られたことである。さらに、私たちは英国人の端正な顔を羨ましく思う故に

「うちらはイエローモンキーだからしょうがない。」

と自虐することもあった。これらの発言に対して、先生は英国人の生徒に注意をし、それと同時に私たちにも注意をした。

「自虐なんてするな。」

と先生は言った。しかし当時の私は「自虐なら別に良くないか。」と思った。私たちが叱られた理由はよくわからなかった。

しかし、ここにユダヤ教徒の方々を見た話と重なる部分があった。二つを重ねて考えてみて、私は答えを導き出した。先生はなぜ私たちに「自虐はするな。」と言ったかというと、おそらく「英国人と日本人に優劣はない。」と言いたかったからではないだろうか。「自分たちに誇りを持て。」ということではないだろうか。当時は、見た目で自分が劣っているように見えたが、実際には優劣などないのである。同様に、ユダヤ教徒の彼らは自分たちの信じるユダヤ教に誇りをもっているから、あの装いをしていたのだろうと思った。あのユダヤ教徒の子どもが、彼らを珍しい人扱いで見つめた私を睨んだのは普通のことだろう。ついじっと見つめてしまい、不信感を与え、さらに彼らを傷つけたかもしれないことに申し訳なさを感じる。

人それぞれ違って当たり前であり、そして優劣などない。自虐をする必要もない。今は、少数派のユダヤ教徒の方々が誇りをもって民族衣装を着ているのは格好良く思える。私は周りの人と違う考えをもつときに、不安になって消極的になってしまうことがある。周

りから否定をされるときもあるだろうし、自分が小さく見えるときもきっとあるだろうと思う。しかし、そんなときでも自分に自信をもって相手も尊重して今後を過ごそうと思う。

最後に、様々なことを学べた英国語学研修に感謝したい。